

『主の祈り』(マタ 6:5~15)

私たちが主の祈りを教えられ、それを祈りつつ生きるというのは、単に教会らしい、クリスチャンらしい合言葉や決り文句を覚えているということではなくて、神さまの望んでおられる関係の中で生きる、ということです。マタイ福音書とルカ福音書に記されている「主の祈り」は共にQ文書を用いていると考えられます。いずれの祈りも著者の個人的な編集の結果ではなく、マタイの方はユダヤ人キリスト者の集会で、ルカの方は異邦人キリスト者の集会で実際に祈られていた形に由来すると思われる。

7 節以下で、イエスは、異邦人の祈りを批判して、あのようにくどくどと祈るな、彼らは、言葉数が多ければ聞き入れられると思込んでいる、と言ったと記されています。8 節にはその理由が記されています。くどくどと祈らなくても、神さまは私たちの必要をご存じで、必要なものを必要な時に与えて下さる方なのです。つまり、異邦人のくどくどと言葉数の多い祈りと、主の祈りとの違いは、長さや言葉の数ではなくて、祈る相手である神さまと祈る私たちとの関係の違い、神さまが私たちにとってどのような方であるか、の違いなのです。イエスは「主の祈り」を教えることによって、私たちに神さまとの関係、交わりを与えようとしているのです。ユダヤ教の会堂では説教の後に、「カディシュ」と呼ばれるアラム語の祈りが唱えられました。カディシュの祈りの言葉には修飾語、枕詞が多く、イエスはこの祈りを簡潔に二言で言ったのが、「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。」という言葉であると思われます。ここに、祈りとは何かと問うイエスの姿勢がみられるのです。

そして、神さまとの関係を表しているのが、「あなたがたの父」という言葉です。あなたがたは子として、父である神さまに祈るのだ、とイエスは言うのです。神さまと私たちの間には、父と子という関係があり、それが、「願う前から必要なものをご存じ」であるという関係なのです。私たちは、教会において、またそれぞれの生活において、この主の祈りを祈りつつ生きます。この主の祈りを土台として、そこに、様々な自分の思いや願い、執り成しの祈りを祈ります。こんなことは祈ってはいけない、ということはありません。私たちが主の祈りを祈る時に、神さまは私たちの父として、その祈りに耳を傾け、私たちに必要なものを必要な時に与えて下さる、そういう父と子の交わりを与えて下さるのです。